

只見ユネスコエコパークがめざすもの⑤

— 学術調査をすすめる —

今月号からユネスコエコパークの三つ目の活動目標である「学術調査研究と人材育成」について紹介します。これは私たちが生きていく上で基盤となる自然環境を守るためであり、その自然環境を絶やすことなく賢く活用するための科学的な根拠や方法を調べ、そうしたことを実践できる人を育てようという取り組みです。

「自然首都・只見」学術調査研究助成事業

この事業は、只見町の生態系、生物多様性の保全、再生および活用に関する基礎研究から応用研究、あるいは歴史、民俗の保存、継承に関する調査研究、そしてそれらに関するシンポジウム、研究会等を開催する研究者や研究グループを助成する制度です。このような助成事業を行う自治体は全国でも珍しいものです。平成二四年度から開始され、研究テーマはこれまでに二四件のほ

ります。申請者も、北海道大学、新潟大学、首都大学東京、横浜国立大学、信州大学と多様で、それは只見町が調査地としてすぐれているからとも言えます。その成果として、タダミハコネサンショウウオという新種の両生類が発見されたことがあげられます。それは只見町の自然環境と生物多様性の豊かさが改めて証明されたともいえるでしょう。ほ

かにも只見町の自然や民俗に関する基礎研究が実施され、着実に成果が蓄積されています。研究結果の発表会は、町民向けとして年度末に行っていますが、学会や学術雑誌でも発表されています。

このようにして只見町の学術情報が全国に向けて発信されるときにも、科学の発展に資することも期待されています。

自然環境基礎調査事業

前述の助成事業はそれぞれの研究者が専門としているテーマで調査研究が実施されていますが、自然環境基礎調査は只見町が抱えている課題を調査研究する事業です。近年、夜間に強力なライトを当てて大量の昆虫が捕獲されています。しかし、只見町は広大な面積を有し、その九〇%以上は山林原野であり、容易に人が近づけない自然環境をもっています。そこには、どのような昆虫が生息しているか未解明のままです。このような状況の中、町内の昆虫を保全する上で、基礎的な資料を得ることが緊急の課題となっています。そこで、平成二六年度から森林総合研究所研究員（当時）の榎原寛さんを中心として、町内の昆虫相について調査しました。調査は二年間



▲福島県初記録のカキノオオキノビオチモンク(♂)、体長3ミリ

設置し、捕獲した昆虫を同定しました。この結果、只見町に生息するカミキリムシ、オオキノコムシ、コガネムシ、クワガタなどの昆虫の目録が完成しました。これには福島県や会津地方でも未記録の昆虫も発見され、良好なブナ林を指標する種も確認されています。これらの研究成果は、只見町ブナセンター紀要の五号、六号の中で昆虫のカラー写真つきで詳しく報告されています。

調査研究成果の活用

調査研究成果が今すぐに私たちの身近で役に立つことは少ないかもしれませんが、しかし、只見町には町史編さん事業をはじめとして長年にわたり調査研究が続けられてきました。こうした科学的な評価の積み重ねが、ユネスコエコパークに登録され、国際的な評価へとつながったのです。また、現在の対象を調べ、記録を残しておくことは、将来を生きる世代のためにも重要です。只見町には長年取り組んできた調査の成果や資料が多量にありますが、それらを保存、活用できるようにアーカイブの整備も必要となっています。



▲学術調査発表会の様子



▲新種として確認されたタダミハコネサンショウウオ